

日本河川・流域再生ネットワーク <http://www.a-rr.net/jp/>  <https://www.facebook.com/JapanRRN>

「日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク (ARRN) の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。

目次	Pages
➢ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➢ 会員寄稿記事	3
➢ JRRN 設立 10 周年記念特集	9
➢ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ	18
➢ 会議・イベント案内 & 書籍等の紹介	19

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクト-『第 5 回「小さな自然再生」現地研修会 in 千葉県・神崎川<12月8日(木)>』開催予告 ※11月中旬にホームページ等で参加受付開始

本年度は「小さな自然再生」の普及促進に向けた 3 回の現地研修会 (座学+ワークショップ) を開催することとし、今年度初回となる「第 3 回現地研修会@福岡県福津市・上西郷川」を 7 月 29 日 (金) に、また「第 4 回現地研修会@兵庫県・武庫川」を 10 月 28 日 (金) に開催致しました。

今年度最終となります「第 5 回現地研修会」を千葉県白井市を流れる神崎川にて 12 月 8 日 (木) に開催することが決まりましたので、皆様にご案内致します。

本研修会では、「小さな自然再生」に関する座学に加え、神崎川上流部に足を運び、生き物や周辺環境を観察しながら、みどりのネットワークづくりの視点からこの地域の環境保全・再生に向けてできることについてワークショップを通じて知見を深める予定です。

参加申込方法については、研修プログラムの詳細が決まり次第、11月中旬に JRRN ホームページ等でご案内します。なお、本活動は (公財) 河川財団の河川基金の助成を受けて実施しています。

(JRRN 事務局・和田彰)

第 5 回「小さな自然再生」現地研修会 in 千葉県・神崎川

- 日時：2016 年 12 月 8 日 (木) 10:00~17:00
- 主催：「小さな自然再生」研究会 (旧称：「小さな自然再生」事例集編集委員会)
- 共催：※調整中
- 会場：千葉県白井市 (座学：千葉ニュータウンプラザ内 会議室 / 現地：神崎川上流部)
- 対象：小さな自然再生に関心のある方々
- 参加費：無料
- プログラム (案)：※調整中



午前：「小さな自然再生」や現地での取組みに関する座学研修 (考え方、留意点、事例紹介、地元取組み等)

午後：神崎川上流域現地研修 (徒歩で神崎川、八幡溜、調節池等を巡り、小さな自然再生のアイデアを交換)

ワークショップ「みどりのネットワークづくりの視点から神崎川上流域の利活用を考える (案)」

- 参加申し込み：研修内容の詳細が決まり次第、11月中旬に JRRN ホームページ等でご案内します。

JRRN 事務局からのお知らせ (2) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクト-『第4回「小さな自然再生」現地研修会 in 兵庫県・武庫川 (10月28日)』開催速報

第4回「小さな自然再生」現地研修会を2016年10月28日(金)に兵庫県・武庫川にて開催致しました。

兵庫県県土整備部土木局武庫川総合治水室や武庫川づくりと流域連携を進める会をはじめとする地元関係者、川づくりに携わる実務者や研究者の方々、また「小さな自然再生」研究会メンバーなど50名超が参加し、「魚類の生息・遡上環境の改善～ウナギ石組や落差工対策」をテーマに座学と現地視察、ワークショップから成る充実した一日を過ごすことができました。

また、現地研修会翌日には「小さな自然再生」研究会も協力する兵庫県主催「第5回みんなで取り組む武庫川づくり交流会」が開催され、前日の現地研修会におけるワークショップでの議論も参考に、子ども達と共にウナギなど生き物の棲み家造りに挑戦しました。

本研修会の詳細は、簡易報告書で改めてご報告させていただきます。本研修会の開催にご協力頂きました皆様、どうもありがとうございました。

(JRRN 事務局・和田彰)



水辺の学びデザインプロジェクト WaSIT がスタート

寄稿者：吉富友恭（東京学芸大学・JRRN 団体会員）

みなさんには水辺の思い出がありますか。水遊びや魚とり、バーベキューや花火、通学やデート、いくつかの場面が思い浮かぶのではないのでしょうか。水辺の自然とのふれあいは人々の感性を刺激し、発見や学びを与えます。また、その場がつくり出すせせらぎや風景は私たちに癒やしも与えてくれます。一方、飲み水はもちろん、日々の暮らしのあらゆる場面で私たちは水の恩恵を受けています。水辺は私たちの生活と様々な場面でかかわりをもっており、そこには多様な教育、観光の資源がみられます。

東京学芸大学では、米国コカ・コーラ財団（THE COCA-COLA FOUNDATION）の助成を受けて「水辺の学びデザインプロジェクト WaSIT」を立ち上げ、今年度から活動を開始しました。WaSIT とは Water Special Interest tours の略。SIT とはテーマ性、趣味性の高い目的型のツアーのことで、一般的な観光スポットを周遊するだけではなく、文化鑑賞、動物、健康など個人やグループの関心にもとづいて目的地を組んだバラエティー豊かなパッケージ・ツアーを意味します。一連の活動で構成されるツアーのパッケージは、ひとつの学習プログラムとして捉えることもできます。

このプロジェクトでは、水辺をテーマにしたオリジナルの Water SIT を企画・体験・発信します。大学生の視点で組み立てたオリジナルの水辺ツアーに出かけ、見つけた場所やコースがもつ学びの可能性を探ります。水辺に関わるキーワードとしては、水循環、水資源、自然再生、都市河川、湖沼、かいぼり、魚類、水族館、インフラ、ダム、堤防、魚道、上・下水道、ミネラルウォーター、舟運、食文化、漁撈、ラフティング、海水浴、自然観察等、他にもたくさん、無数にあげることができます。

水辺の魅力を伝えるためには、とらえにくい水辺の事象や活動をわかりやすく表現することが重要なポイントになります。ツアーを経験した後、組み込まれる場所やつながりが有する学びの可能性を考え、グループワークによってマップやショートムービー等の独自の教材をデザインしていくことも目標の一つです。

この夏、「水辺の自然」や「水辺の楽しみ」をテーマにした課題（ショートストーリー）を提出した水辺

の学びのデザインに興味のある約 20 名の学部生、大学院生が集まりました。環境、理科、地域研究、国語、美術等、様々な専攻の学生からなる WaSIT・第 1 期メンバーです。川や海の楽しみ方、魚とりや川の清掃の経験、水生生物、水辺の癒やしなどをテーマにした、独創性の高い魅力的なストーリー、リアルで豊かな経験談など、表現力に富んだ多くの作品が寄せられました。

9 月には水辺を知るプレ・ツアーとして、北海道、栗山と千歳での 3 日間のフィールドツアーを実施しました。このツアーでは、ダムや魚道の見学、河川での流水の働きや水生生物の調査、蕎麦や日本酒など水に関わりの深い食文化の体験、湖面を利用したレジャー、水族館の見学等、食事や自由時間も含め、思う存分に水辺を楽しみました。同じ場面でも、学生それぞれの視点・感性で実習を楽しんでいたのが印象的でした。



図 1. 水辺の学びデザインプロジェクトのロゴマーク
(Design: Kenichi Masaki)



写真1. 夕張スーパーダムの見学



写真5. 手づかみで捕まえたニジマス



写真2. 普段は入ることのできない監査廊へ



写真6. 昼食は良質な水を使ったせいり蕎麦



写真3. 栗沢頭首工・魚道の解説



写真7. 小林酒造の酒蔵見学



写真4. ポンウエンベツ川で流水の働きを体験



写真8. ハサンベツ川での水生生物調査



写真 9. 捕れた生物の解説



写真 13. サケのふるさと千歳水族館の大水槽



写真 10. ヤマメ、エゾウグイ等を間近に観察



写真 14. タッチプール水槽の魚に夢中



写真 11. 滞在了雨煙別小学校コカ・コーラ環境ハウス



写真 12. 支笏湖をスワンボートで遊覧

今後、メンバーは上記ツアーを通して学んだことをふまえ、チームになってオリジナルのツアーを企画し、関東エリアの水辺へ出かけます。その経験を通じて生まれたアイデアをもとに、ツアーパッケージやショートムービー等の教材をデザインしていく予定です。

このプロジェクトはこれから5年間続きます。活動の様子はFacebookで発信していきます。読者のみなさんにもどこかの水辺でお会いするかもしれません。ぜひご支援をお願いします。

東京学芸大学環境教育研究センター
「水辺の学びデザインプロジェクト WaSIT」事務局

E-Mail: watersit@u-gakugei.ac.jp

Facebook:
<https://www.facebook.com/TGU.WaSIT/>

11月

出典：全国パワースポット



あの日のあの川 リレー日記 ～第22話～

あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第22話主人公 守谷賢人

(筑波大学社会・国際学群国際総合学類 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：千葉県利根川)

「小さな冒険」

いつのこと？：小学生

どこの川？：利根川水系印旛沼

いつもの「あの日のあの川」と一風変わって、今回は印旛沼について取り上げようと思う。印旛沼は、千葉県北西部に位置し、北印旛沼と西印旛沼に分かれている。私の地元である印旛はその二つの沼の間にある小さな街だ。西印旛沼には鹿島川・高崎川・手繰川・神崎川・新川・桑納川・師戸川等の河川が、北印旛沼には江川・松虫川等が流入し、印旛沼の水は、長門川を通過して利根川に流れる。そしてその水は工業用水や農業用水、上水などに使われている。地域の人々にとっては欠かせない存在の印旛沼であるが、幼い頃の私は沼自体に興味がなく、ましてや沼の果たす役割など知りもしなかった。

そんな私に印旛沼を訪ねる契機が訪れたのは、小学校中学年の頃のことである。ある日の全校集会で校長先生から以下のようなアナウンスがあった。

「印旛沼でカミツキガメが発生しました。みなさん、沼には絶対に近寄らないでください！」

禁止されることこそやりたくなってしまうのが小学校中学年男児の性だ。しかもカミツキガメというなんとも珍しい生き物を見ることができるといふ。印旛沼への興味を一気にそそられた私と友人カンちゃんは、すぐに印旛沼での冒険を計画した。決行の日は、次の土曜日になった。

ワクワクしながら日々を過ごし、ついに当日を迎えた。はやる気持ちを抑えながら、自転車で印旛沼へと向かった。家を出て役所を目指し、役所の裏の道をまっすぐ進んで坂を下る。そうして目の前に現れたのが印旛沼だった。「大きい…！」ただただそう思った。

初めて見る印旛沼の規模に圧倒されつつも、私とカンちゃんは本来の目的であったカミツキガメの搜索を開始することにした。それで、とりあえず近くにあった用水路のようなものに近づいてみたのだが、それがとにかく臭く、汚かった。到着した時の感動とのギャップにガッカリしたが、目的は果たさなければならぬので用水路に網を入れてはすくう動作を繰り返した。しかし出てくるのはゴミやザリガニばかりでカメが出てくる気配など微塵も感じられなかった。

成果をあげることができないまま時間ばかりが経過した。そうして、この用水路にはいないのだと判断した私とカンちゃんは、場所を変えることにした。どこかもっとカメのいそうなところへ移動しようと、自転車で跨り沼の周りを走り出した。その時私はハッとした。沼と周辺の田んぼ、夏の空とが調和した美しい景色、心地よい風、昼過ぎに降り注ぐ太陽の光…。とにかく気持ちが良かった。静けさの漂う雰囲気とは裏腹に気分は驚くほど高揚した。思わず隣で自転車を漕いでいたカンちゃんに声をかけてみると、カンちゃんも同様の気分を味わっているようだった。それから私たちは、カメを探すという本来の目的も時間も忘れてひたすらに自転車を漕ぎ続けた。この景色の中だったら、いつまでもどこまでも自転車を漕いでいられるような気がした。

気づくといつの間にか沼を抜け出して丘の上まで来てしまっていた。カメのことなどその時はもうどうでもよくなっていたので、沼には戻らずそこでカンちゃんと遊ぶことにした。丘の上には展望台があり、そこから沼が一望出来るようになっていたので、夕方まで丘に残って夕焼けの沼の景色を待った。

いよいよ夕焼けの時間が近づいてくると、昼間は真っ青だった空がどんどん茜色になっていった。沼の水がそれを反射し、目の前の景色が全て茜色に染まり、その美しさに感動を覚えた。今でも思い出すことができるほどである。

大学生になった私はときたま印旛沼の近くを自転車ではなく、車で走ることがある。今では印旛沼との接点がめっきり減ってしまったが、あの時の小さな冒険は今でも忘れられない。どこかゆったりとして変わらずにいる美しい景色を見ながら、あの時感じた高揚感を思い出す。

※カミツキガメは大変危険な生き物です。決して近づかないようにしてください。

(次は山田玲奈さんにバトンを託します)

水辺からのメッセージ No.90

岡村幸二 (JRRN 会員)

名水百選御清水 :

水清き大野の共同洗い場 昔も今も水と深く付き合う



撮影：2016年8月（福井県大野市・御清水）

◆大野盆地は巨大な貯水池

周囲を 1000m級山々に囲まれた大野盆地は、基盤岩という不透水層の上に、スポンジのように水を吸収する層が重なっています。また大野の豊富な地下水の約 40%は水田からの涵養水だと言われています。

◆名水のまち大野

湧水の豊富な大野市の中でも、御清水（おしょうず）は水清き大野の象徴として、現在でも共同洗い場として親しまれています。「清水町の南方に方 40 間の水溜りを設け城郭内濠の源泉として押門を設け災害又は戦争にも備えた」と伝えられています。（現場にある解説板より）。

■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。（JRRN 事務局）

アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN) 及び 日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)は、2016年11月9日(水)に設立10周年を迎えます!

～会員皆様へ JRRN 顧問及び理事よりメッセージをお届けします～

2016年11月9日(水)、「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」及び「日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)」は設立10周年を迎えます。

本特集では、はじめに ARRN/JRRN 設立前夜の状況から現在までを振り返り、ARRN/JRRN 顧問である玉井信行・東大名誉教授に総括頂いた寄稿文をご紹介します。続いて、アジアの河川再生の知と経験の結節点として ARRN 及び JRRN が担う役割について土屋信行

・JRRN 代表理事より、更には ARRN/JRRN 設立準備段階より現在までネットワークの発展に尽力頂いている3名の理事より、設立前後の思い出を含む会員皆様へのメッセージを紹介させていただきます。

本特集が、日本を含むアジアにおける河川・流域再生ネットワークの設立に至る思いを馳せ、ARRN 及び JRRN の次なる10年の新たな挑戦へと繋がるきっかけとなれば幸いです。【JRRN 事務局】



【思い出の一枚】

「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」設立式典における日本・中国・韓国の登録署名式。(2006年11月9日@東京)

ARRN/JRRN の更なる展開を期待する

玉井信行 (JRRN・ARRN 顧問/東京大学名誉教授)

はじめに

第3回世界水フォーラムが2003年に京都・滋賀・大阪で開催されたことは、行政を含め日本の水関係者に大きな影響を与えたと言ってよいであろう。中央政府レベルにおいても、水関係のすべての分野の国際化が始まった。

本稿の主題であるアジア河川・流域再生ネットワーク (Asian River Restoration Network, ARR) と日本河川・流域再生ネットワーク (Japan River Restoration Network, JRRN) との活動も、こうした動向の中で発展、展開してきたと言ってよい。

第3回世界水フォーラムで主要テーマの一つである「水と自然と環境」の中で、国土交通省、環境省、農林水産省、土木学会、応用生態工学研究会などの後援を得て「適応的流域管理と川の自然復元」セッションが開催され、筆者は実行委員長を務めた¹⁾。こうした関係から、ARRN 結成の前夜から関係してきたので、結成10周年を迎えたことに慶びを感じるとともに、草創記における関係者の努力に深甚な敬意を表したい。

第3回世界水フォーラムへの準備

世界水フォーラムの本会議の準備のためにリバーフロント整備センターが開催してきた国際シンポジウムの記録を辿り、ARRN 設立前夜の状況を考えてみたい。

2002年9月には第3回世界水フォーラム・プレシンポジウムとして「川の自然再生」国際シンポジウムが東京で開かれた¹⁾。主題は、川の蛇行復元と川の流量変動であった。共に局部的な問題ではなく、川の全域に係わる課題であり、当時の日本では、川の基本的な機能復元にはこうした川の全流程に係る地形の多様性や自然の攪乱の復元が重要である、という概念は広まっていなかった。西欧から紹介されたキシミー川、ライン川、マレー・ダーリン川などにおける事業は、世界的な先進事例であった。

2002年11月には河川環境展との併催で、「河川の自然再生と流域・都市」シンポジウムが行われた¹⁾。この時は河川を管理する国土交通省、流域の山林、田地を管理する農林水産省、環境を管理する環境省との連携で行われ、内容も広がりを見せた。

2003年1月のマレーシア会議「河川再生に関する東アジア地域セミナー」は国際協力事業団の後援を得て、マレーシア、インドネシア、タイ、フィリピンなど

の途上国と日本、ヨーロッパ連合という先進国の連携を図った。

ARRN への道のり

時系列的に辿れば、2004年度から「水辺・流域再生に関わる国際フォーラム」がリバーフロント整備センターの主催で開始され、これが第4回世界水フォーラムでの国際的連携セッションを産み出した母体となった。年度に一回の頻度で国際シンポジウムが開かれ、筆者が関係したのものには次のようなものがある。

水辺・流域再生に係わる国際フォーラムが2005年1月に東京で開催され、大都市での河川再生、先進的ネットワークの関係者が集まった。事例としては、清溪川河川復元、シンガポール川の再生、蘇州河再生、チェサピーク湾再生、マージ川再生、ヨーロッパ河川再生ネットワークであった。



第1回 ARRN 国際フォーラム (2005.1.19@東京)



第2回 ARRN 国際フォーラム (2005.10.27@東京)

2005年10月に開催された水辺・流域再生に係わる国際フォーラムでは、武漢市での長江再生、マニラでのパシグ川再生、エバークレースの再生、米国河川ネットワーク、イタリアの河川再生ネットワークからの講演があった。

第4回世界水フォーラムは2006年3月にメキシコシティで行われ、日・中・韓が「アジアモンスーン地域での川の自然復元」と題するセッションを開催した。その中で、セッションを運営した3か国を中心としたアジアにおける川の自然再生に関する永続的な意見交換、技術の集積を担う組織が重要である、という共通認識に達した。



川の自然復元セッション (2006.3.20@メキシコ)

中国、韓国、日本によるARRN設立記念国際フォーラムが2006年11月9日に東京で開催された。その内容は、設立同意書への署名式、水に関する国際ネットワークの紹介と「アジア河川再生の今後の展開」と題する総合討論であった。総合討論においては中国、韓国、日本、及びマレーシアの河川再生事業の紹介の後、発表者とヨーロッパ河川再生センター代表者の5名をパネリストとして迎え、筆者を座長として「アジア河川再生の今後の展開」について討論が行われた。



第3回ARRN国際フォーラム (2006.11.9@東京)

ARRNと国際学会、国際ネットワークとの連携

前述したように、ARRN設立に至る過程で多くの国際シンポジウムを開催し、アジア、欧米の河川・流域再生事業に係わる専門家、また、そうした個別の事業を繋ぎ合わせるネットワークの運営責任者との交流が進められてきた。ARRNの初代会長に選出された筆者が考えたことは、個人を通じた技術交流を深めると共に、組織単位の連携を目指すことが持続的な交流にとってより重要ではないか、ということであった。

ARRN活動の初期段階には、筆者はInternational Association for Hydro-Environment Engineering and Research (国際水圏環境工学会、略称IAHR)の副会長、会長の時期であったので、先ず、IAHRとの連携を考えて行動していた。IAHRの専門家に日本で話をしてもらいたいと考えていた中から実現したのは、ARRN/IAHR Joint Seminar on Ecohydraulics and Environmental Hydraulicsであった。このセミナーはIAHRの理事会が名古屋で開催された折をとらえ、共に副会長であったProf. Peter GoodwinとJoseph Leeを迎えて2008年9月に東京で開催された²⁾。IAHRの役員が日本の河川生態、環境水理関係者を知り、日本の研究者・技術者がIAHRの先端的な情報に接することを期待した企画であり、双方にとって有益な結果が得られたと考えている。



ARRN河川環境講演会 (2008.9.16@東京)

次の例は、2010年9月にソウルで行われたIAHR第8回生態水理(eco-hydraulics)国際シンポジウム(8th ISE)において、特別セッションに応募しARRN円卓会議を開催した。主題は「ネットワークを通じて河川再生技術とその指針をどう発展させるか」であった³⁾。この企画では、国際集会で公開のセッションを行い、本会議に参加する専門家も円卓会議に出席することを期待したのである。

議題は、円卓会議と同様に8th ISEの特別セッション

ンとして開催された第7回 ARRN 国際フォーラムの論評, ARRN の河川再生技術指針, 河川再生ネットワークの役割, の3つであった。ヨーロッパ河川再生センター会長の Dr. B. Fokkens が 8th ISE に出席するという機会をとらえることが出来たので, ARRN 国際フォーラム, ARRN 円卓会議の両者に講演者, パネリストとして登壇を依頼し, 幅広い経験と深い見識に接することが出来て, IAHR 8th ISE との連携は実りあるものとなった。



アジアの河川再生技術共有に向けた円卓会議
(2010.9.14@ソウル)

次いで, ARRN 事務局が中国へ移動した後の 2013 年における活動例に触れておきたい。ARRN, China は事務局を中国水利水電科学研究院 (略称 IWHR) に置いている。IAHR のアジア太平洋地域部会の事務局も近年は IWHR が引受けており連絡は密なので, この時も 2013 年に成都で行われた IAHR 世界大会と連携し, 第 10 回 ARRN 国際フォーラムを IAHR 世界大会の特別セッションとして開催した⁴⁾。



第 10 回 ARRN 国際フォーラム (2013.9.10@成都)

ARRN の憲章では国会員(National Member) は一国に一つと定められている。しかし, 台湾においては河川・流域再生事業も盛んであり, 技術的には日本と

の交流も盛んである。この, いわゆる台湾問題は ARRN が会員を増やしたいと願う時の難問題であった。TRRN (台中河川・流域再生ネットワーク) は 2008 年に設立以来, JRRN と事務局間で継続的に情報共有や様々な相互協力を進めていたので, 2012 年 12 月に地域ネットワーク(Regional Network)という会員資格で ARRN に加入することとなり, 国家問題は一段落した。

JRRN の活動－小さな自然再生を中心として

JRRN は ARRN と時を同じくして, 2006 年 11 月に設立された。そして, シンポジウムの開催, 国内外の事例の集積, 技術指針の検討など, 研究と実務との橋渡しに寄与するために精力的に活動を続けてきた。2012 (平成 24) 年応用生態工学会全国大会で開催された研究集会「小さな自然再生が中小河川を救う」に出席して, ARRN, JRRN の資料の中には「小さな自然再生」の事例がほとんど含まれていないことに気が付き, 筆者は愕然とした記憶がある。

この経験に基づいて JRRN の関係者に働きかけ, 活動を釣合い良く進めることを提案した。また, 応用生態工学会との連携を深めるように努力してきた。こうした呼びかけに呼応して, JRRN と小さな自然再生実施グループの皆さんとの協力で「小さな自然再生」事例編集委員会が成立し, 筆者も監修者として参加して, (公財)河川財団河川整備基金の助成を得て 2015 年 3 月に「できることから始めよう 水辺の小さな自然再生事例集」⁵⁾ が JRRN から発行されたことは大変うれしいことであった。



水辺の小さな自然再生事例集(2015.3 発行)

これ以後「小さな自然再生現地研修会」⁵⁾ が各地で開催されるようになった。このような活動を通して, 小さな自然再生、河川管理者が行う大きな自然再生、地域づくりの新しい連携が始まり、相互に刺激し合いながら更に発展して行くことが期待される。

最近は、巨大災害が発生する一方、それを人間の力だけで防御することは費用が莫大となるだけでなく、予算の賢明な使い方に相応しいか、という議論が起きている。防災と環境を同時に考えようとする国際シンポジウムが、世界工学会議の関連行事として2015年11月に京都で行われた。「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」国際シンポジウムはJRRNと第9回災害関連ジョイント国際シンポジウムとの併催であり、「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」実行委員会が企画・実行に当たった。筆者は実行委員長を務め、セッション1「河川・水域の防災に関するイノベーション」の5講演、セッション2「環境・水利用に関するイノベーション」の5講演、及びセッション3「総合討論」の運営にあたった。講演録⁶⁾は2016年3月に発行されている。



国際シンポジウム「河川技術が果たすイノベーションと社会貢献」(2015.11.28@京都)

まとめ

1997年の河川法の改正に示されるように、河川環境の課題は河川管理の中では「後発の課題」であった。その分野での具体的な事業である河川・流域再生の学術・技術は、20年の時を経て、応用生態工学会の成立、小さな自然再生における市民参加など、発展を遂げ、社会に定着して来つつある。その中で、新しい概念の普及、発展にネットワークが果たした役割は大きなものがある。

将来に向けての課題は、河川環境の課題は「後発のままではよいのであろうか」という問いである。温暖化による災害の巨大化が心配される中で、被害を軽減し、人命を守るためには地形、生態系などの自然が持つ潜在能力をより生かす知恵が求められていると考える。地域や国際的なネットワークを通しての連携は、益々重要になることをこの小文のまとめとしたい。

おわりに

ARRN/JRRNのホームページでは、活動成果(ニュースメール(毎週)、ニュースレター(月刊)、刊行物、行事報告、データベース、年次報告書(ARRNでは一部表現が異なる))と河川再生事例(国内、国際)が設立以来のアーカイブとしてまとめられており、利用できる。

ARRN事務局は中国、韓国と順を追って移動したが、ホームページの管理は一貫して(公財)リバーフロント研究所及び(株)建設技術研究所国土文化研究所で行なわれており、設立10周年を迎えるにあたって、事務局関係者の努力によるARRN/JRRNの成果の取りまとめ、公開が、河川再生、流域管理に関心を持つ技術者、研究者、市民に大きな貢献をしていることを改めて思い出している。

参考文献

- 1) 玉井信行:「適応的流域管理と川の自然復元」セッションについて、特集・第3回世界水フォーラムセッションの紹介－自然環境－、雑誌河川12月号、pp.34-37、2002.
- 2) <http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/39>
- 3) <http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/97>
- 4) <http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/234>
- 5) <http://jp.a-rr.net/jp/news/info/567.html>
- 6) <http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/169>

JRRN 設立 10 年を迎えて

土屋信行 (JRRN 代表理事 / 公益財団法人リバーフロント研究所)

JRRN が発足して 10 年の節目を迎えました。個人会員数は 750 人を超えるまでになり、日本全国で会員皆様が様々な活動をそれぞれ工夫しながら取り組まれています。

また、日本国内の活動に加えて海外の方々との繋がりも拡がり、名実共にアジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)としてアジア地域の情報結節点としての役割を確立しつつあります。

ARRN は、メンバーである中国、韓国、台湾、マレーシア、オーストラリア、タイ、パキスタン、インド、などに加え、香港、モンゴル、イラン、インドネシア、ベトナムなどとも繋がりがつあります。更に、情報共有地域として欧州やイギリスなどとも連携を深めてきました。それぞれの国・地域柄もあり日本国内の活動とは異なる条件も多い中で、相互の連携構築の努力を続けております。

一例として、間もなく仲間に加わるイランの活動を紹介させていただきます。イランというと砂漠の国という印象を持たれる方も多いと思いますが、テヘランは緑豊かな公園都市として美しい景観を作り上げています。降雨量は年間 500 ミリ程度と日本に比べれば非常に少ないものの、この雨水を有効に使う術を紀元前から

営々と続けて来ました。イランは雨季と乾季が明確な地域にあり、普通に考えれば、このような地域には文明は生まれにくいように思えます。しかし、ここに建設されたのがペルシャ帝国であり、ペルシャといえば正倉院の御物にあるガラス器や琵琶がシルクロードを通じてやって来たことでも有名です。また、[コタツ] もその起源はペルシャだと言われています。

このイランの中心都市であるテヘランは、4000 メートルを越える山々に降った雪解け水を都市まで運ぶ運河を造り上げました。それが有名な地下トンネル運河[カナート]です。このカナートにより運ばれた大切な水を一滴も無駄にしないように管理し、直径 1 メートルにもなる街路樹を育て緑溢れる公園を整備しています。テヘランではカナートで運ばれた水が地表面流となって川を形成しており、このテヘランでの河川再生の課題は、都市化の進展による川の汚染であり、人口の集中と河川の問題は各国共通の課題でもあります。

ARRN、またその日本窓口を担う JRRN を通じて、これからもアジア各国が持てる知識と経験を共有し、すべての国・地域が豊かな河川環境を実現できる様に協力していきたいと考えています。

JRRN と私

佐合純造 (JRRN 理事 / 株式会社徳倉建設)

JRRN 設立 10 周年、おめでとうございます。JRRN の設立は平成 18 年(2006年)11月ですが、JRRN と私の関わりは、平成 17 年(2005年)8月からです。このとき、私はリバーフロント整備センター(現リバーフロント研究所)に勤務することになり、最初の仕事が半年後に控えた第 4 回世界水フォーラム(2006年3月メキシコで開催)の中で行う日中韓共同開催の「河川再生分科会」のお手伝いでした。

半年の準備期間は紆余曲折いろいろありましたが、分科会はなんとか無事終了しました。この際、分科会

の成果は、「日中韓で河川再生に関する知識・技術情報の交換と人材交流を積極的に進める」という 3 カ国の共同提言でした。しかし、具体的に誰がどのように行っていくのかが明らかでなかったため、国内関係者や 3 カ国で半年ほど議論がなされて、結局、3 カ国で ARRN という連携組織をつくる、そして、各々の国内体制を整えるため、RRN(日本は JRRN)を設立することで一致しました。設立のいきさつが長くなりましたが、要はその後 6 年余の私のリバフロ時代を通して JRRN は切ってはきれないものになりました。

JRRN は ARRN との対応だけでなく、国内での会員募集、様々なイベントの開催や協力、海外からの訪問者サポート、国内向けの情報発信など積極的な活動を行っています。事務局長だった私は途中で抜けてしまいましたが、現在までの事務局の皆さんのご努力に敬意を表する次第です。

私自身、いまは仕事の上では JRRN の活動とはまったく無関係になってしまいましたが、いつも送られてくる会員向けのニュースメール、ニュースレターは新鮮な内容で興味深く読ませていただいて、いろいろな

場での話題のネタに使っています。また、毎年、企画されている「桜のある水辺風景」の募集も楽しみにしています。

最後になりますが、事務局を抜けた立場でえらそうなことは言えませんが、今後とも JRRN の活動を有意義かつ長続きさせるためには、当初の目的を見失うことなく、他の組織ではできないこと、やっていないことを地道に行っていくことが大切と思っています。

JRRN の 10 周年に思うこと

白川直樹 (JRRN 理事 / ARRN 技術委員 / 筑波大学)

ARRN および JRRN の設立から 10 年が経ちました。2003 年に京都・大阪・滋賀で開催された第 3 回世界水フォーラムの前頃からの熱気を思い出します。アジアモンスーン地域の川の特徴、自然再生と河川文化への渴望、住民と行政の関係性、国際情報交流の意義など、いくつもの背景をもって始まった活動だと思っています。

この 10 年、JRRN と ARRN は着実に活動成果を積み上げてくることができました。ご参加されている個人と団体の会員がネットワークの最大の財産です。他にもご協力いただいている皆様に支えられています。人と並んで重要な要素が技術であり、現場の川と水辺そのものです。人は社会の主人公であると同時に、水辺を引き立てる脇役でもあるかもしれません。

河川再生は都市中心部、郊外域、田園地域、山間部のそれぞれに異なった発展をみせているように思います。地形や一部の生物のように普遍性の高いものから

地域固有種や歴史といった特殊性の高いものまで渾然となって分かちがたく存在する川という場をどのように扱うか、その方法は手探りながら進歩しています。単に一種類の生き物を大切にすることもなければ経済効率一辺倒でもなく、生物群集だけでもなければ歴史や文化だけでもない、自然と人間が向き合う川の在り方がこれからも追求されていくものと考えています。

日本、韓国、中国の 3 ヶ国にてスタートした ARRN も、他の国々との交流が広がっています。事務局は 3 ヶ国を一回りしました。事例も技術も情報交流も、アジアの川づくりはまだまだこれからです。

最後に、全国や海外を飛び回って幅広い活動をまとめ、前進させてくださっている JRRN 事務局に最大の敬意を表します。今後も日本とアジアの水辺が豊かで潤いにあふれた場所でありませうように。

JRRN10周年によせて

伊藤一正 (JRRN 理事 / ARRN 情報委員 / 株式会社建設技術研究所)

2003年3月16日～23日にかけて、京都を中心に開催された第3回世界水フォーラムにおいて、河川環境の国際的なネットワーク設立の重要性が提案され、2006年のメキシコでの第4回世界水フォーラムでアジアの河川再生ネットワークの設立が提案され、そして、2006年11月9日にアジア河川・流域再生ネットワーク (ARRN) が設立されました。

このアジア河川・流域再生ネットワークには、日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)、韓国河川・流域再生ネットワーク (KRRN)、中国河川・流域再生ネットワーク (CRRN) の3団体も同時に組織され、情報交流の活動が開始されました。JRRNは2016年10月31日時点で、団体会員60組織、個人会員750人へと大きな発展を示しております。当初は、河川環境再生や自然再生の情報を如何に国内外に流通させることが出来るかと、関係者で連日連夜議論をしていたことから考えると、会員数の拡大は大きな達成感となっております。

設立から10年を経過し、その間の情報発信は他に類を見ない、独自性があり、新規性があり、メンバー諸氏に大いに役立つことが叶っているかと思えます。会員の皆様、事務局の皆様方の日々の努力の集大成と思えます。また、海外の国や機関からも参加希望が出ており、日本が培った技術や経験が、まさに国境を越えて、国際的に求められている事も実感しております。

このネットワークの大きな特徴としまして、僅かばかりではありますが組織の支援が入っておりますが、まったくの有志で運営されている事、自分たちの経験を情報として共有してゆく事、いわば、経験の自慢を出来る場所として共有されている事に、その良さが集約されています。当初は、国内外の様々な事例を集めて、その新規性や独自性などを引き出して、他のプロジェクトの参考にできればと、紙面やWEBでの発信をしておりましたが、いつしか定期ニュースが流れ、毎年の活動報告がなされ、また、技術レポートまでも発刊されるに至っては、もはや有志連合をはるかに超えて、組織的な活動に変貌してきております。設立当初には考えられもしなかった体制になりました。

日・中・韓を結ぶ河川技術のネットワークを担うJRRN、3国間で、いくばくかの政治的な軋轢もありますが、技術の分野では、各国の経験の共有を強く求め

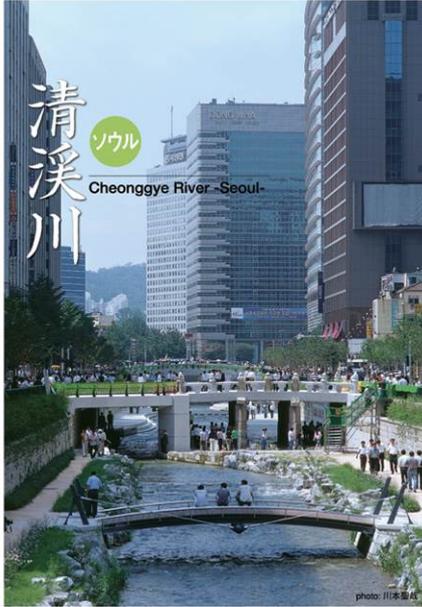
あい、密度の濃い連携がなされています。このネットワークの成果のひとつともいえるでしょう。過去には、多くの情報交換の仕組みが出来てはいましたが、10年にもわたる継続は、特筆されるものと言えます。既に私たちは、日本での多くの取組の事を知りえると共に、中国での取組や韓国での取組にも触れる事が出来ます。さらには、台湾、マレーシアなどもメンバーに加わり、さらには中東の国からもオファーが出てくるなど、そのネットワークはさらなる拡大を続けてきております。

理事の一人として、このネットワークの運営に関わり、組織運営の在り方、組織拡大の仕組みづくりなど多くの事を学ばせていただきました。少ない予算で、いかにして会員に魅力を感じていただける情報発信が出来るか、かつ、会員の意見を海外に伝える仕組みが作れるか、課題は大きかったですが、現実になってきている事を思うと、この10年は有意義な期間であったことが分かります。

10年前に比べ、情報発信の仕組みや情報共有の仕組み、また、国際的な情報共有・伝達のスピード変化が多々あります。新しい仕組み・ツールや新しい組織・人材との連携が、これまでのネットワークでの共有に新しい風を吹き込んでくれることにもなるかと思えます。

アジアで始まった河川・流域再生ネットワーク、次の10年でさらなる情報交換を進め、国際的な新しい情報や技術を各国が共通に獲得でき、自身の技術として取り込んで、さらなる発展につながる事を願います。これも、会員の皆様の情報発信・共有に対する願い、事務局の多大な努力によることであり、その努力に大いに感謝いたします。

新しい河川再生・環境情報の交流交換の場の、さらなる発展と、次の10年のチャレンジを期待しております。



清溪川
ソウル
Cheonggye River - Seoul

覆蓋道路のオープン化と高架道路の撤去で有名な清溪川は、ソウル特別市の歴史や文化を象徴する都市のシンボルとして再生されました。

The Cheonggye River has been restored as the symbol of the Seoul Metropolitan City's history and culture through the removing of paved roads and overpass above the river.

アジアのムーブメント

もう始まっている



黄浦江
上海
Huangpu River - Shanghai

人々の生活に密接な黄浦江は、親水性の向上・修景等によって、都市生活に潤いのある河川に再生されました。

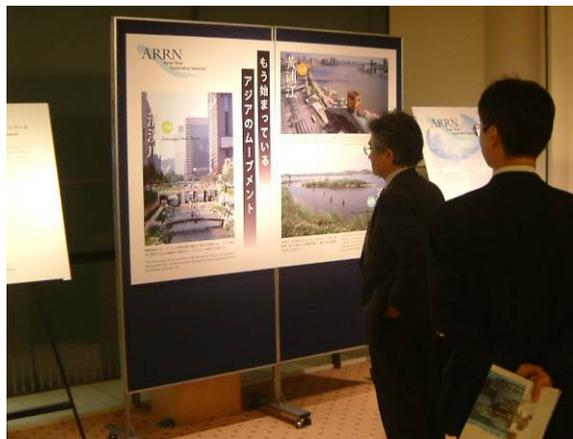
The Huangpu River, closely linked to the people's lives, has been restored to enrich their urban life through the water-friendly improvement and landscaping.



遠賀川
福岡
Onga River - Fukuoka

多自然工法が施された川では、水の流れ、水深、底質等、変化に富んだ水際線が蘇り、豊かな自然環境が創出されました。

In a river reconstructed with the Nature Oriented River Works, a rich natural environment has been newly created through the restoration of diversified waterside line consisting of water flow, water depth, and bottom characteristics.



【思い出のパネル】

「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」設立式典の会場に飾られた展示パネル。
(2006年11月9日@東京)

(JRRN 設立 10 周年記念特集 終わり)

【JRRN 会員からの提供情報】

■ 第13回ふくおか水もり自慢! in 古賀 (12/3 開催)

古賀河川図書館の古賀館長より、『第13回ふくおか水もり自慢! in 古賀』のご案内です。



■日時: 2016年12月3日(土)
10:00~

■場所: 古賀市生涯学習センター (福岡県古賀市)

■参加費: 無料

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2596.html>

【JRRN 会員からの提供情報】

■ 「第191回 河川文化を語る会『未来への記憶を呼び覚ます』(11/30 開催)

公益社団法人日本河川協会様より御提供頂いたイベント情報です。



■日時: 2016年11月30日(水)
18:30~20:30

■場所: エル・おおさか (大阪府立労働センター)

■参加費: 無料

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2599.html>

【JRRN 会員からの提供情報】

■ 河川水辺の国勢調査の同定に関する勉強会 (11/29 開催)

11/29(火)に東京で開催される『河川水辺の国勢調査(河川、ダム)の同定(底生動物、陸上昆虫類等)に関する勉強会』のご案内です。



■日時: 2016年11月29日(火)
13:00~17:00

■場所: (一財) 水源地環境センター 大会議室 (東京都千代田区)

■参加費: 無料

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2587.html>

【JRRN 会員からの提供情報】

■ 鞍瀬塾・第46回公開講座『国土交通省の生物多様性保全への対応 (11/8 開催)』

鞍瀬塾事務局より、愛媛県西条市で開催される鞍瀬塾・第46回公開講座のご案内を頂きました。



■日時: 11月8日(火)
10:30~16:00

■場所: 桜樹公民館 2 階ホール (愛媛県西条市丹原町)

■参加費: 無料

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2583.html>

【JRRN 会員からの提供情報】

■ 第14回 川の自然再生セミナー (11/11 開催)

(公財) リバーフロント研究所より川の自然再生セミナーのご案内です。



■日時: 2016年11月11日(金)
13:00~17:25

■場所: 月島社会教育会館 4 階ホール (東京都中央区)

■参加費: 無料

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2576.html>

【海外からの提供情報】

■ 「RRC (英国河川再生センター) 最新ニュースレター」ご紹介

RRC (英国河川再生センター) の最新会報 (2016年10月号) が事務局より届きました。

本号では、WWFより発行された「河川再生~計画と管理の戦略的アプローチ~」の紹介記事等が掲載されています。



◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/2602.html>

(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

※前頁でご案内した行事の一部は本欄では掲載していません。

■ 応用生態工学会 第3回北信越事例発表会

- 日時：2016年11月11日(金) 9:30-17:10
- 主催：応用生態工学会
- 場所：富山県立大学 大講義場(富山県射水市)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2433.html>

■ 第14回「川の自然再生」セミナー

- 日時：2016年11月11日(金) 13:00~17:25
- 主催：公益財団法人リバーフロント研究所
- 場所：月島社会教育会館4階ホール(東京都中央区)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2468.html>

■ 第16回九州「川」のワークショップ in 遠賀川

- 日時：2016年11月12日(土)~13日(日)
- 主催：第16回九州「川」のワークショップ in 遠賀川実行委員会
- 場所：黒崎ひびしんホール(福岡県北九州市)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2470.html>

■ 第4回流域管理と地域計画の連携に関するワークショップ

- 日時：2016年11月15日(火) 14:30-17:30
- 主催：流域管理と地域計画の連携方策研究小委員会
- 場所：土木学会講堂(東京都新宿区)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2474.html>

■ ダム湖生態系に関するセミナー

- 日時：2016年11月22日(火) 13:30-17:00
- 主催：水源地生態研究会
- 場所：TKR 仙台カンファレンスセンター(宮城県仙台市)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2486.html>

■ 第191回 河川文化を語る会『未来への記憶を呼び覚ます・・・文人・堤橋次郎が記録した大正・昭和の水都・大阪の眺めから』

- 日時：2016年11月30日(水) 18:30~20:30
- 主催：公益社団法人日本河川協会
- 場所：エル・おおさか 6F(大阪市中央区)
- <http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2484.html>

■ 第5回「小さな自然再生」現地研修会 in 千葉県・神崎川

- 日時：2016年12月8日(木) 10:00~17:00
- 主催：「小さな自然再生」研究会 他
- 場所：千葉県白井市
- ※詳細は本誌1ページ目をご覧ください

■ 皆様からのイベント情報提供をお待ちしています!

全国で河川再生に関わる様々な行事が開催されています。ローカル情報のPRや共有を目的に、皆様からの情報提供をお待ちしております。

書籍等の紹介

Publications

■ できることからはじめよう 水辺の小さな自然再生事例集 (2015.3 発刊)

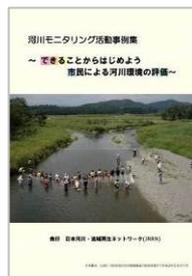
- ・監修：玉井信行 東京大学名誉教授 / JRRN 顧問
- ・編集：「小さな自然再生」事例集編集委員会
- ・デザイン：本間由佳 鶴川女子短期大学
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)
- ・出版年月：2015年3月



市民が河川管理者と連携して日曜大工的に取り組む「小さな自然再生」の事例集です。小さな自然再生の専門家の方々、専門知識の社会への橋渡しの専門家、そして有志の若手研究者や実務者で協働制作しました。

■ 河川モニタリング活動事例集～できることからはじめよう 市民による河川環境の評価～ (2014.3 発刊)

- ・監修：白川直樹 筑波大学准教授(JRRN 理事)
- ・執筆協力：河川再生に携わる市民団体や行政機関
- ・編集：JRRN 事務局、筑波大学白川(直) 研究室
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)
- ・出版年月：2014年3月



市民が主体的に取り組む河川環境のモニタリング活動の実態を調べ、各地のモニタリング活動事例や市民による河川モニタリング活動の更なる活性化に向けたヒントを紹介しています。

■ 上記冊子の「印刷製本版」入手方法

※PDF版はこちらから：<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/>

JRRN 事務局までご連絡ください。送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。(JRRN 会員限定)

JRRN 会員募集中 JRRN membership

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

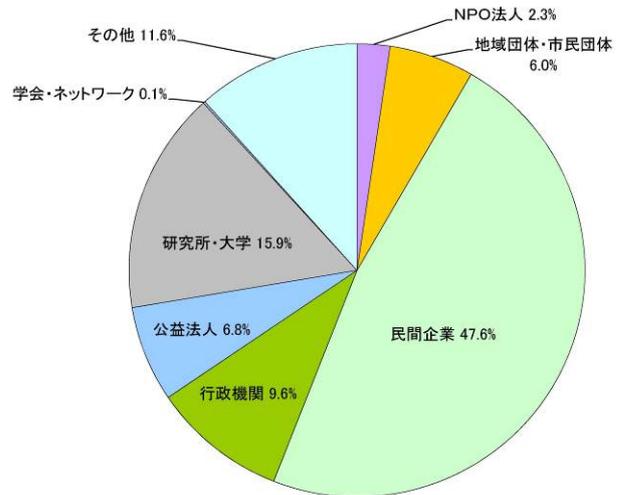
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週1回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2016年10月31日時点の個人会員の所属構成

(個人会員数：750名、団体会員数：60団体)

※10月の新規入会数：個人会員3、団体会員0

JRRN 会員特典一覧表 (団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階 (公財)リバーフロント研究所 内

Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net

URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。



CTI 建設技術研究所
国土文化研究所